

V 第3分科会の概要

テーマ：希望の高齢社会ー新たな可能性への挑戦ー

開催日 平成23年11月5日（土）～6日（日）

会場 イイノホール（東京都千代田区内幸町）

趣旨・概要

高齢者の地域における社会的役割を認識し、「社会参画」や「自立」を通じて地域を支える担い手として捉え直すとともに、高齢者の社会参加の促進を図る上で、果たすべき生涯学習の役割等について研究協議しました。

分科会内容

平成23年11月5日（土）

(1) 基調講演

演題：「超高齢社会の現状と課題」

講師：宮本 太郎 氏（北海道大学大学院法学研究科教授）

【講演内容】

- これまでの日本では、教育や社会保障がおろそかにされる傾向があったが、長期的雇用慣行のなかで教育や社会保障の機能が代替された。この仕組みは、完全雇用の崩壊、家族形態の変容、現役世代の減少により、1995年を境に崩壊した。
- 超高齢社会における処方箋として、「現役世代の能力向上」、「女性労働力率向上」、「高齢者の社会参加」、「医療費、年金の削減」などの取組が考えられるが、これらの方法には限界がある。
- これまでのライフサイクルで一方縦列だった教育・雇用・社会保障において、相互乗り入れの仕組みを作ることが重要である。特に、生涯学習の高度化によって、高齢社会を乗り切るべきだ。





(2) 特別講演

演題:「学びから始まる希望の高齢社会」

講師: 樋口 恵子 氏(NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長)

【講演内容】

- これからの高齢者が上機嫌で生きるためには、「知るは力」が重要。その意味で生涯学習が重要な役割を果たす。
- 超高齢社会においては、変えるべきものを変える勇氣(courage)、人知に及ばないところとして受け入れる冷静さ(serenity)、それらを取り違えないための知恵(wisdom)が必要であり、取り違えないようにするためには正確な学習が必要となる。
- 人生100年社会において、人々の幸せを保証するのが教育であるとすれば、教育をつかさどる国をはじめ、各レベルの自治体は、このような学習機会を提供する義務がある。
- 生涯学習を見直すということは、これから人生100年を生きる若い人々の人生を大切にすること。どのような学習をしたら、より幸せな人生100年を築けることができるのか、教育の現状全体を見直すことにつながるのではないのか。



(3) 事例発表

テーマ:「高齢者の持つ可能性への期待—誰もが生きやすいまちづくりをめざして—」

内 容: 急速な高齢化の進展により、介護問題や高齢者の社会的孤立の問題などが顕在化しています。こういった状況の下、地域の活性化という観点から、高齢者への期待について事例報告を行いました。

■公民館を核としたまちづくりの事例

西尾 雄次 氏 (石川県内灘町教育委員会教育長)

(主な内容)

- 街中の17ヶ所に配置された公民館で頻繁に教室を開催し、住民参加を促し、まちづくりにつなげている。
- 全公民館に常勤の公民館主事を置き、公民館主事と公民館役員、町会幹部で公民館の運営を行っている。こうした仕組みをとることで、「地域コミュニティ運営への参加は住民の義務」との意識の浸透を図っている。
- 町職員一人ひとりが、生涯学習的な自発的で学習意欲に根付いた形で、仕事を進めれば、非常に大きな成果が得られる。



■認知症の人とともにつくる誰もが生きやすいまちづくりの事例

永田 久美子 氏（認知症介護研究・研修東京センター研究副部長）

（主な内容）

- 認知症の人たちが、介護や医療を受ける側とか、地域に支えられる側だけではなく、地域で働く、地域を支える一員として活躍する事例が出てきている。
- 「人として生きていくために大切な事って何だろうか」ということを、認知症の人が生きる姿を通して、子どもから年長者までともに学びあう地域が増えてきている。
- 「古い、認知症になっても地域の中で自分らしく暮らし続ける」新たな価値観や、その実現を目指した取組が都会地でも過疎地でも広がりつつあり、「認知症」はこれからの超高齢社会を生きる一人ひとり、そして地域にとっての試金石である。



■行政に頼らない高齢者による地域再生の事例

豊重 哲郎 氏（鹿屋市串良町柳谷公民館長）

（主な内容）

- 柳谷地区（通称ヤネダン）では、「土着菌」製造、高齢者世帯の緊急警報装置導入等、行政に頼らない地域再生を実践している。
- ボランティアだけではリーダーは絶対に続かないということを証明しないと、後に続く人が出てこない。
- 地域再生よりも大切な汗と知恵をどうやって引き出すかということが、リーダーの大切な役割。
- 結い復活というのは、文化保存だけでは駄目で、活用をいかに引き出すか。エデュケーションの語源は引き出すということ。私は汗を引き出す、相手を引き出す。



■災害ボランティアの事例

中橋 徹也 氏（東京いのちのポータルサイト監事）

（主な内容）

- 自分たちの「まちを知る」ということが防災減災にとって最初の一步なので、自分たちで歴史や自然環境を調べたり、地域のいろいろなことを学習しながら、その学んだことを地域に還元していく取組を実践している。
- これまでの防災関係者だけでなく、地域のさまざまな人による、多様な視点で多様な教育を進めることで、防災教育を含め、防災が少しずつ変わってきている。
- これまでのハードウェアやソフトウェアに加えて、ヒューマンウェア（ひとを活かした）による取組を進めることで、地域に根ざした防災の取組になる。





(4) ポスターセッション

全国各地で高齢者を対象とした学習機会の提供と学習成果の活用について先駆的な取組を行っている行政や各種団体6団体の活動パネルを展示し、活動内容について説明しました。



● 出典団体等によるポスター例



杉並区教育委員会、
すぎなみ大人塾卒業生
(すぎなみ大人塾&卒業生の活動事例)



中野区、中野区教育委員会
(なかの生涯学習大学の活動事例)



NPO法人NALC
(時間預託制度について)

● 出展団体

No	団 体 名 称	内 容
1	(社) 静岡県地域女性団体連絡協議会	高齢女性を対象とした消費者教区について
2	(社) シニア社会学会	ICTを活用した高齢者の社会参画と主体的な学び
3	シニア読み聞かせボランティア 「リプリントネットワーク」	シニアの絵本読み聞かせ活動
4	杉並区教育委員会事務局社会教育センター、すぎなみ大人塾卒業生	すぎなみ大人塾&卒業生の活動事例
5	中野区、中野区教育委員会	なかの生涯学習大学～ともに学び、ともに活動することを目指して～
6	NPO法人NALC	NALCの活動

平成23年11月6日（日）

（5）事例発表

テーマ：「生涯学習を通じた社会参画」

内 容：高齢者にとっての生涯学習及び社会参画活動の意義・役割並びに促進のための具体的方策について、学習側の視点及び提供者側（受入れ側）の視点、また学習成果をいかした社会参画の視点から報告を行いました。

■企業と大学の連携によるシニア層への学習機会の提供の事例

益川 浩一 氏（岐阜大学総合情報メディアセンター准教授）

（主な内容）

- 「くるるセミナー」では、シニア層に生涯学習プログラムを提供しながら、新しい生き方を提示することで、これまで生きてきた道を肯定し、お互いの尊厳を認め合いながら、彼らの中にある社会貢献の意思に具体的なイメージを与えている。
- セミナーは、①シニア層を学びの場へと誘う基本セミナー、②自主的学習グループ・サークルの形成、③社会的な様々な活動、という三層構造となっている。
- シニアが第二の人生に足を踏み出すことを支援し、彼らが新たなネットワークを形成しながら、様々な社会活動を目指していくことを応援しているのがセミナーの特徴である。



■「共育」「協働」の学びの実践の事例

天沼 浩 氏（江戸川区文化共育部文化課長）

（主な内容）

- 江戸川総合人生大学の3つの基本理念は、①「共育」「協働」の社会づくり、②ボランティア立区の推進、③「地域文化」の創造と継承である。
- 本学は、区民が地域の課題やその解決策について学び合い、力を合わせて地域をよりよくするために取り組む人材育成の象徴的な場である。現在7・8期生が学んでおり、在学中に目的や、やりがいを見つけた462名が卒業した。
- 卒業生でつくる42グループが、地域の史跡・寺社のガイドや、インド人学校での授業補助などの地域貢献活動をしているほか、個人でも認知症サポーターなどが元気に活躍している。



■高齢者大学の受講者の視点からの事例

米永 栄一郎 氏（港区チャレンジコミュニティ大学受講者）

（主な内容）

- チャレンジコミュニティ大学の目的は、60歳を超えた高齢者を対象に、それぞれが今まで培ってきた知識・経験をいかし、生きがいのある豊かな人生を創造し、また学習を通じて個々の能力を再開発し、最終的には地域活動のリーダーを養成することである。
- CC大学のような学びの場は、新たな地域との関わりを持つうえで、





とても重要である。CC大学の卒業生が地域にちらばり、地域活動の面で大きな力となることは間違いない。

■高齢者大学の受講者の視点からの事例

神山 利 氏（立教セカンドステージ大学受講者）

（主な内容）

- 立教セカンドステージ大学は50歳以上のシニアを対象としており、受講生がセカンドステージの生き方を自らデザインすること、そして人と人とのネットワークを形成して多様な社会参加の担い手になることを目指している。
- 社会経験を積んでからの学びというのは、若い学生時代の学びとは違い、幅を持って取り組むことが出来るし、深く本質を探ることができる。



■地域参画の実践事例

奥村 光央 氏（放送大学栃木学習センター「まちづくり研究会」代表）

（主な内容）

- 退職後に放送大学大学院に入学し、宇都宮市主催の「まちづくり提案」に学生として応募して1位に輝いた。
- 放送大学の仲間との懇親会を通して、今までにはない様々な交流を持ち、まちづくり研究会で市役所に提案した過程についてもメンバーとの交流だった。
- 年をとると価値観が固定し、よく言えばぶれないが、悪く言えば頑固にすぎない。それぞれの提案がまったく相反した時に、どうまとめるかについて苦労した。



■高齢者を対象とした人材派遣の事例

上田 研二 氏（㈱高齢社代表取締役会長）

（主な内容）

- 株式会社高齢者は、60歳以上のシニアを対象とした人材派遣会社である。
- 高齢社のこだわりは、①高齢社という社名、②設立年月日が2000年1月1日、③所在地が日本の中心である東京都千代田区、④出資者を個人に限定の4つである。
- 高齢社の経営理念は、定年を迎えても気力・体力・知力のある方々に「働く場」と「生き方」を提供していき、社員が一番、二番目がお客さん、三番目が株主という考えである。



(6) パネルディスカッション

テーマ：「希望の高齢社会ー新たな可能性への挑戦ー」

基調講演、特別講演、事例発表等を通して、6名のパネリストが、希望の高齢社会について討議を行いました。

コーディネーター

■牧野 篤 氏（東京大学教育学研究科教授）

（主なコメント）

- 超高齢社会は高齢者だけの議論になりがちだが、若い世代、次の世代にどうつなげていくのかが問われている。当然だが、超高齢社会は、すべての世代が共に生きる社会である。その中で、学ぶということ、生涯学習をどう捉えて、私たちがこの社会をどう組み替えていくかが大きな課題になってくる。
- 学びを通じて他者と交流し、その交流を通じて新しい価値を作り出していく。その価値を多くの方々と分かち合う形で社会に広げ、さらに新しい価値を生み出していく。超高齢社会は、社会の在り方が変わっていく中で、私たち一人ひとりが、互いに配慮し合いながら、共に新しい社会を作り出していく社会となるのではないか。



パネリスト

■西尾 雄次 氏（石川県内灘町教育委員会教育長）

（主なコメント）

- 老いも若きも、社会貢献することによって得られる自己肯定感や幸福感といったものを無くしてはいけない。それによって自分も社会も喜べる社会、それが本当の希望の高齢社会を開く道である。



■豊重 哲郎 氏（鹿屋市串良町柳谷公民館長）

（主なコメント）

- 地域再生には現場主義とそれを実行する強いリーダーが不可欠である。それと併せて、ゆりかごから墓場までという、長生きして良かったという社会を実現していかなければならない。



■牧野 光朗 氏（飯田市長）

（主なコメント）

- 皆で議論して学び合って初めて地域づくり、産業づくりや、人づくりということが進んでくる。その地域をどのようにしていくかを自ら考えて決めることができる地域社会こそ高齢社会の中で希望のある地域になっていくのではないか。





■上田 研二 氏（株式会社高齢社代表取締役会長）

（主なコメント）

- 会社経営も市政経営も地域経営も、リーダーは常にそこにいる人たちに夢を与えることが一番大事。皆に夢を与えられない限りリーダーではない。



■野口 美津子 氏（港区チャレンジコミュニティ大学受講者）

（主なコメント）

- 60歳の時に何かをしたいと考えてチャレンジコミュニティ大学に入学した。卒業後は、CC大学での学びを生かして、民生委員として活動している。今後も地域の役に立ちたいと考えている。



■二宮 皓 氏（放送大学副学長）

（主なコメント）

- 放送大学の学びが、地域や社会でどうつながるのかを調べたが、事例が少ない。大学として高齢者のための学び支援、実践支援を充実し、生涯学習の観点から期待される役割を果たしていきたい。

